

小川原湖民俗博物館の 軌跡と意義

渋沢敬三影響下の地方民間博物館

Activities to Preserve a Former Museum's Collection Materials :
On Local Private Museums under the Influence of Keizo Shibusawa

山田 巖子

YAMADA Itsuko

- ① 研究の背景と問題の所在
- ② 博物館創設者と渋沢家の関わり
- ③ 十和田科学博物館と民俗展示
- ④ 小川原湖博物館から小川原湖民俗博物館へ
- ⑤ 民具研究の基盤を作る
おわりに

【論文要旨】

小川原湖民俗博物館は 1961 年に渋沢敬三の秘書であった杉本行雄が青森県三沢市に設立した民間博物館であった。2006 年に経営が破綻し、建物の老朽化から 2015 年に廃館となった。筆者は 2015 年に当該博物館の旧蔵資料の移設に関わり、旧蔵資料の一部を勤務先の弘前大学人文社会科学部で預かり、整理と公開に努めてきた。その結果次のようなことが分かった。

渋沢にはこの博物館を「小川原湖を中心とした自然、人文を広く含むものとする構想」があり、杉本には「十和田湖と小川原湖を結ぶ大規模な観光計画」があった。当初総合博物館として構想された博物館が「小川原湖民俗博物館」と改称されたのは、中道等による精力的な民具蒐集の結果であった。中道には、上北地方をアイヌ民族をはじめとした少数民族と和人が交流した場であったことを生活文化から証明したいという意図があり、博物館の旧蔵資料の中には土器も含まれている。

旧蔵資料からはまた、小川原湖民俗博物館と宮本馨太郎の関わりを看取できる。旧蔵資料の中に「昭和 35 年 立教大学民俗資料室」と書かれた「民俗資料整理台帳」が残っている。当時立教大学教授であった馨太郎が小川原湖民俗博物館に送ったものであろう。馨太郎は、1962 年に「日本在来民具の民族学的研究」で科学研究補助金を得て、その研究分担者の中に中道等の名前がある。また、岩手県在住であった森口多里もまた研究分担者になっているが、小川原湖民俗博物館には森口からの寄贈品があったことが「台帳」から読み取れる。

小川原湖民俗博物館は、宮本馨太郎には、「気心の知れた」相手のコレクションで、民具分類・整理のための試案を重ねる場として機能していたと考えることができる。

中央の研究者、郷土史家、実業家が、お互いの役割に深く立ち入らない形でそれぞれのなすべきことをするという協同のあり方が、地方民間博物館を可能にしたといえる。

【キーワード】 地方民間博物館、民具、宮本馨太郎、文化財以前、鉄道、渋沢敬三

はじめに

民俗学、民族学、民具学、漁業史研究に大きな軌跡を残した渋沢敬三の仕事に関する研究は既に多くの蓄積があるが、2019年に刊行された国際常民文化研究機構編『国際常民文化研究叢書』第13巻「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」は戦前の渋沢敬三とアチックの同人たちの水産史研究における多彩な活動を明らかにし、渋沢敬三の目指したハーモニアスデヴェロップメントの内実⁽¹⁾に迫っている点で注目される。研究代表の加藤幸治は、戦前の渋沢水産史研究室の活動を「同時代的な布置」と「問題意識の多様性」という二つの論点から明らかにしてゆく方向を打ち出している⁽²⁾。

本稿の対象となる小川原湖民俗博物館の設立もまた、渋沢敬三の人脈と関わる仕事の一つである。渋沢栄一の書生、渋沢敬三の秘書として渋沢家に仕えた杉本行雄は、戦後、渋沢農場の整理のため青森県を訪れ、実業家に転じた。渋沢敬三の指導を受け、1961年に青森県三沢市に民間博物館を設立した。開館当初の民具の収蔵点数は5,500点とされ、杉本が経営する古牧温泉の付属施設として長年愛されてきたが、2004年に経営が破綻、その後閉館状態が続き、2015年に建物の老朽化により廃館となった。

先の加藤の言に倣えば、「同時代的な布置」として、小川原湖民俗博物館は戦後の高度経済成長期に設立された地方民間博物館として位置づけられる。「民具」という概念がまだ地方に浸透していなかった1961年という時代に民具を中心とする博物館を設立したことは、民俗学史、博物館史としても特筆されることである。この博物館の軌跡を、渋沢敬三の地方への文化的貢献として検証するのではなく、戦後の交通網の整備や観光開発、「文化財」意識の高まりなどとともに考察し、学術的な文脈だけではなく、地方における文化振興の文脈、大衆的な「民俗」理解、「民具」概念の受容の過程として考察してゆく必要がある。青森県における小川原湖民俗博物館の軌跡は、地方が戦後、「民俗」なる概念、「博物館」なる概念を受容してゆく過程と重なりと見える。

本論は、戦後の地方民間博物館を、中央と地方、研究者、実業家、郷土史家など多様な人物が交錯し、多様な文脈の中で営まれたものとして捉え直す試みである。それはアチックの「仲間」以外の異質な人々との「分業・分担と連携」のあり方であったといえる。

なお、筆者は2015年に小川原湖民俗博物館が老朽化のために廃館となる際に旧蔵資料の移設作業と関わり、弘前大学地域未来創生センターの事業として、民具の保存活用への資料整理と情報発信を続けてきた。弘前大学に寄託された民具は2017年に整理が終わり、三沢市に移設した。他に絵画資料、標本、民具受入台帳など文字資料の一部を三沢市に移動し、現在は、映像、写真、文献資料を整理しつつある。その成果を既にいくつか公表している⁽⁴⁾。本論の資料の多くは現在弘前大学に寄託されている旧蔵資料に負っている。

①……………研究の背景と問題の所在

民俗学史においては、研究者を中心とした学史を相対化し、民俗学運動の総体を描き出す基礎作業が進められてきた。具体的には①民俗学の成立を支えた地方の民俗学者や郷土史家たちの動き、②民俗学を可能にしたメディアの力、③同時代の文脈の中の「民俗学」の位置、を問ういわば「新しい民俗学史」執筆の動きがあった。⁽⁵⁾1995年度から始まった青森県史民俗編の編さん事業の中でも、「郷土研究」の枠組みの研究を民俗学史に位置づける作業が行われてきた。⁽⁶⁾

小川原湖民俗博物館を考える上でも、館長を務めた八戸市の郷土史家中道等の仕事や、博物館に一時勤務していた民具コレクター田中忠三郎の動きを無視することはできない。また、博物館自体を「民俗学を可能にしたメディア」と捉え直す必要がある。

日本の博物館の戦後をふりかえると、1951年に博物館法が制定公布され、博物館は社会教育機関としての性格を色濃く打ち出したため、全国の都道府県市町村では社会教育を意図した博物館づくりが活発に行われるようになった。そのため、1950年代には行政が主導して各地に地域博物館が設立された[金山：201]。しかし、青森県では、県立博物館（青森県立郷土館）の設立は1973年まで待たなければならなかった。

このような中であって、小川原湖民俗博物館は、戦後の早い時期の地方民間博物館として注目される。神崎宣武は、小川原湖民俗博物館を、1950年設立の鶴岡市の致道博物館⁽⁷⁾、1946年に財団が設立された新潟市の北方文化博物館と並ぶ戦後の先駆的な民間博物館であると評価している。しかし、神崎が挙げた民間博物館はその地方の旧藩主や豪農など、経済的に恵まれた名家の資産が元になっている。金山善昭は、戦後の日本の税制が相続ごとに資産を減少させる制度であることから、名家が収蔵品や土地建物を寄贈して、登録博物館の認可を受ける背景には、遺産保全という側面があることを指摘している⁽¹⁰⁾[金山 2001：201]。このような博物館では、設立に際しては名家の遺産を「郷土」の遺産として読み替えが行われている。

神崎が挙げた地方博物館に対し、小川原湖民俗博物館は青森県外から来た他所者が起こした博物館であり、「郷土愛」でも「文化遺産」でもなく、「観光」を視野に入れた実業家の作った地方民間博物館であるというところに特徴がある。

「博物館」経営は、当初は十和田観光電鉄という私鉄の経営と関わった経験があり、観光開発会社を経営する設立者の「実業」のうちにあったといえる。しかし、博物館の実際の蒐集そのものは郷土史家が担い、民具の整理は経営者の会社の従業員（地元の人たち）が担った（学芸員の採用は1972年以降）。民具が「文化財」となる以前に、博物館には様々な人物がそれぞれの思惑を持って集まり、お互いの思惑に深く立ち入らずに、それぞれがなすべきことをなす形で博物館運営に携わったといえる。この点が他の民俗博物館とは異なる点である。

この異質な者同士の結びつきが地方に民俗博物館を可能にしたことを本稿で論じてゆきたい。

②……………博物館創設者と渋沢家の関わり

本節では、小川原湖民俗博物館を設立した杉本行雄と渋沢家の関わり、博物館設立に至る過程を見てゆく。杉本行雄は、自身でも自伝めいたものを折に触れ書き、また民俗学者の神崎宣武や旅行ライターらに自分の半生を語り、記録させている。⁽¹¹⁾これらの記録は第三者の記録と齟齬がある部分もある。本節では主に神崎稿によりながら、複数の伝記を参照してその輪郭を示す。

杉本は1914年（大正3）、静岡県田方郡中伊豆町の貧農の家に生まれ、父の死後、行商を営む母に育てられた。小学校卒業後に樺太で炭鉱夫となるも身体を壊して退職、姉が当時三菱造船所取締役の郷古潔の親戚に嫁いだ縁で、1928年（昭和3）に郷古の書生となり、16歳で渋沢同族会社の事務員兼栄一の書生として採用された。

1931年に栄一が死去し、杉本は敬三に仕えることになった。杉本は稲垣に、『豆州内浦漁民史料』[アチック・ミュージアム 1924～25年]の史料の整理や原稿の校正を手伝ったと語っている[稲垣 1996: 69～70]。敬三の手記には、敬三の民俗学方面の仕事に杉本が参加したという記述はなく、敬三の方では、杉本が民俗学的な仕事に敬意と関心を持っていたことを、杉本が博物館構想を語るまでは知らなかったのではないかと推測される。1941年に敬三が第一銀行副頭取になったときに杉本は秘書に抜擢され[笹本・小笠原 1996: 67]、1946年（昭和21）、敬三が大蔵大臣を辞任するまで務めた。

戦後、渋沢家が青森県上北三本木町（現十和田市）に所有していた農場が農地買収の対象となり、敬三の依頼で農場を解体整理をするために三本木町に移住した。青森に赴任するにあたって杉本は敬三から「東北は民具の宝庫であるから君は製材所のかたわらできるだけたくさんの民具を集めてくれ。いま集めておかないと散逸して今後の民俗学研究に大きな支障をきたすことになる。分類・整理はあとで学者に任せればよい」[杉本 1989: 4]と頼まれたと記す。

山林を伐採整理するために製材業を営み、原木の代金は農場長（のちに初代十和田市長になる水野陳好）に支払うものの、製材したものの値段は杉本にまかされた。1950年に朝鮮戦争が勃発、特需により資金を蓄える傍らで三本木地区の製材林産組合役員などを経験し、地元知己を得た。杉本は製材所を営みながらも朝鮮戦争後の木材の価格低下を見越して観光開発を志したという[神崎 1989: 39]。

のちに杉本が社長となる十和田観光電鉄（以下「十鉄」）の前身は、1922年（大正11）に開通した軽便蒸気鉄道の十和田鉄道で、東北本線古間木（現・青い森鉄道三沢駅）と三本木駅（後の十和田市駅）を結ぶ路線であった。1951年に改軌・電化し、社名を十和田観光電鉄とした[青森県史編さん室近現代部会編 20014: 344]。

杉本は、渋沢家の秘書時代に栄一にがこの鉄道会社の株を持っていたことを記憶していた。栄一の死後、同族会社の株式の配当を整理していたときに、配当のない赤字会社の一つだけあり、その会社が「十和田鉄道」であった[稲垣 1996: 67]。

杉本は製材所を営む傍ら、1951年に十鉄の取締役となった。56年には渋沢農場の伐採を終え、三沢産業株式会社を設立[稲垣 1996: 112]していたが、この会社は製材所の整理会社のようなも

ので、無職同然であった〔笹本・小笠原 1993：118〕。翌年、1957年に十鉄の社長に就任し、ここから鉄道を基盤に十和田湖を中心に県東北部一帯の観光開発に乗り出してゆく。杉本の構想は十和田湖から奥入瀬、小川原湖、野辺地町、下北半島へと拡大し、「青森県東部を一大観光地とする雄大な構想へ」〔青森県史編さん室近現代部会編 20014：344〕発展してゆく。

杉本が十和田から始めた、事業の拡大の過程は、洪沢敬三から薫陶を得た民俗学の知識を「観光資源」として活用してゆくプロセスでもあった。

③……………十和田科学博物館と民俗展示

杉本は十鉄の入り口と出口にそれぞれ博物館を設立位置した。(図1)「小川原湖民俗博物館関連地図」を見れば、三沢駅(博物館設立時は古間木駅)と十和田市駅(当時は三本木駅)が私鉄で結ばれていることが分かるだろう。本節では、杉本の博物館構想のうち、最初の博物館である十和田科学博物館建設の経緯を検討してゆく。

杉本は常々、自身の作った博物館を敬三の指導通りに作ったと語ってきたが、杉本と敬三の思惑



図1 小川原湖民俗博物館関連施設地図

(『小川原湖民俗博物館と祭魚洞公園』〔小川原湖民俗博物館編 1989：220頁〕掲載の「関連地図」に旧蔵資料を受け入れた施設①～⑧及び十和田科学博物館旧蔵資料を受け入れた十和田ビジターセンターを加筆)

の違いや設立の経緯を、伝記と周辺の情報から検討してゆきたい。

十和田湖は1937年（昭和12）に国立公園になり、1956年には岩手県、秋田県にまたがる八幡平地区を編入し、十和田八幡平公園となっていた。十和田科学博物館（写真1）は1953年に十和田湖畔の休屋に開館した。

当時の十和田湖の状況を把握するために、1953年の青森県の地方紙『東奥日報』を見てみよう。同紙では、開館前の7月には十和田湖の観光が何度も取り沙汰されている。7月31日の記事では「十和田湖を食う？業者／観光客は秋田口へ／“高い、不親切に無為無策”」という見出しがあり、「本県側の休屋、宇樽部、子ノ口に宿泊する客は減少をたどり」と書かれ、競合する秋田県側に客を取られている状況を嘆き、「悪らつな業者」「無為無策の県」「中央の観光地だけに重点を置く厚生省」が批判されている。このような状況で休屋に博物館を建設することは青森県側の打開策となったはずだ。

休屋の土地の獲得の経緯は、稲垣真美の聞き書きが詳しい。十和田湖の管轄が営林署から厚生省に移り、十和田湖開発が休屋棧橋中心に行われるという情報を得た杉本は、古くからの借地人が新しい利用計画を出さなければ、借地の権利を取り上げられることを知った。すぐに3千坪の借地権を手に入れ、厚生省の開発計画を調べて博物館や水族館などの公共施設の建設計画があることを知る。その時には既に民具の蒐集も進んでいた⁽¹²⁾ことから、杉本はこの地に民具を中心とした博物館を建設する構想を立て、敬三に打診した〔稲垣 1996：113～114〕。

敬三は杉本の提案に対し、「十和田湖周辺は人が住んでいなかったところだから」民俗博物館より、自然科学博物館か、火山博物館のほうがよい〔稲垣 1996：115〕と助言したという。十和田湖はカルデラ湖であることから、カルデラに関する資料を集め、さらに国立公園内にあることから植物の資料を収集するよう助言した〔山田 2018：27〕。杉本の回想では軽く触れられているところであるが、科学博物館に関与した岡田桑三の子息岡田一男は、十和田博物館は、敬三の「強い主張で」地学系を中心とする博物館になったと記している〔岡田 2016：25〕。岡田の回想を根拠とするならば、「民俗博物館」や「民俗展示」に執着していたのは、渋沢ではなく杉本の方ということになる。

岡田桑三は、栄一の書生、敬三の執事として渋沢家に仕えた後、東京シネマ新社社長となっていたが、十和田科学博物館をつくる際に敬三の指示で設立幹事長として参画した。開館前の博物館運営委員会には、敬三委員長の下、石黒忠篤、杉本行雄、岡田桑三らが入っていた〔稲垣：116〕。

稲垣の聞き書きによれば、敬三が最初に杉本に紹介したのは、日本の国立公園の設立に功績のあった造園学者の田村剛で、田村が杉本に各分野の専門家を紹介した〔稲垣：115～116〕。また科学博物館の手本として埼玉県長瀨の自然科学博物館を紹介した〔笹本・小笠原 1993：125〕。長瀨の自然科学博物館を紹介したのは、同博物館が秩父鉄道株式会社が設立した博物館で、十鉄の経営者である杉本が学ぶべきものがあると考えたからであろう。また秩父は「地質学的にいうと一つの大きな標本展示場」で、「古生代から近代にいたるまでの地質的な構造」〔渋沢 1955、十和田開発株式



写真1 十和田科学博物館 2019年8月筆者撮影

会社編 1976：3] が示されているという土地の特徴を活かした博物館であったからと推測できる。敬三は十和田の自然とカルデラの地形を活かした博物館を構想していたといえる。

桑三の回想によれば、桑三と杉本は最初に長瀨の秩父自然博物館を訪ね、新井重三館長からカルデラ模型の制作を依頼できる人物として成蹊高校教諭の西村健二を紹介されたという〔岡田 1981：10～12〕。岡田は西村に依頼して、十和田湖や八甲田のカルデラ模型



写真2 渋沢敬三の「声のレコード」
(弘前大学寄託資料) 筆者撮影

を作成してもらう。それは十和田科学博物館の目玉展示物となった。⁽¹³⁾

十和田湖の観光開発は青森県の課題であったにもかかわらず、杉本の計画に対して、青森県は難色を示していた。このことは神崎〔1989：41～43〕も触れているが、青森県は十和田湖に県立の水族館を作る計画があり、杉本の提出した博物館申請手続きを県の方でとどめていた。朝日新聞青森版1953年7月23日には、十和田湖畔の学生会館に対し、県の青森県の関連庁の話として、「日貸問的なものになることが予想され」「博物館付属学生会館という美名にかくれて一もうけをねらっている」という談話を掲載している。

同じ朝日新聞でも、博物館の開館日が迫った8月14日の全国版には「宿泊施設もある博物館」の見出しで十和田科学博物館の記事が載る。

「十和田湖畔にそのカルデラ資料を中心として、宿泊施設まである世界にも珍しい科学博物館が開設されることになった」とあり、博物館の付属施設として宿泊施設があることを強調している。また、施設は三本木町にあった杉本の製材工場を移転改築したもので、「その構想はすべて渋沢氏のプランによる」と記されている〔朝日新聞 1953年8月14日：7面〕。このような新聞報道に敬三の働きかけがあったことは想像に難くない。

青森県の地方紙『東奥日報』は、1953年4月6日、8月14日、28日に十和田科学博物館の記事を載せている。同紙の8月14日の記事と同日の『朝日新聞』全国版の記事を比べると、『東奥日報』には渋沢敬三の名前がないことが注意を引く。28日の記事には敬三の名はあるものの、博物館の運営に「本県」の関係者がどのように関わっているかの方に重点があることが読み取れる。

既に別稿で紹介したが、弘前大学に寄託された小川原湖民俗博物館旧蔵資料の中に、1953年8月28日の十和田科学館開館式の渋沢敬三と杉本行雄の挨拶がレコードの形で残されていた(写真2)。これを修復し、音源を復元したものを、筆者は翻字して紹介した。⁽¹⁴⁾

この中で敬三が、博物館付属施設として、宿泊施設を「極めて簡素な、上品な宿泊施設」と表現したのも、青森県側の批判を意識したものといえることができる。

小川原湖民俗博物館旧蔵資料「資料収集関係書綴」には、十和田科学博物館の開館当初の組織が示されている(当時の肩書き、専門分野は筆者が補足)。「館長 河田杰(青森県営林局長) 運営議長 渋沢敬三 運営委員 鈴木醇(火山学、北海道大学理学部長)、藤永元作(水産学 太平洋養

魚株式会社（後にくるまえび養殖株式会社）社長）、中山正則（元石川島重工業（株）筆頭常務）、杉本行雄（専門学術委員 久野久（火山学、東京大学教授）、西条八束（陸水学 名古屋大学助教授）、大町文衛（昆虫学、三重大学教授、大町桂月の息子）、村井三郎（植物学、元青森県営林局林業試験所技師）、和田千蔵（生物学、弘前大学教授）、小井川潤三（郷土史家）」とあり、敬三の人脈（鈴木醇、中山正則）と郷土人、あるいは郷土ゆかりの人物（河田杰、大町文衛、村井三郎、和田千蔵、小井川潤次郎）が敬三の構想した「科学博物館」を支えていたことが分かる〔山田 2018:30〕。

渋沢敬三の名で出された開館の案内文（弘前大学寄託旧蔵資料）によれば、開館の展示室はカルデラ資料室、植物資料室、動物資料室、人文科学資料室、その他に分かれていた。人文系に関しては郷土と関わる研究に携わった人物のコレクションを顕彰もかねて展示する、というのが敬三の提案であった。これは科学的な資料とともに地域文化の担い手として当事者性の高い人物の資料を同一の場所で展示することを意味していた。渋沢の開館挨拶からその趣旨説明の部分を取り出してみよう。

「人文科学も興味がある問題が多々あるのでありますが、なにせこういった視聴者が一時的にちよっと足を止めるという特殊な博物館に必ずしも適当かどうか」「そこをお願いをいたしまして、あるいは、時期を限り、あるいは、一期間拝借いたしまして、その方（郷土研究にたずさわる郷土人……引用者注）のご収集をお借りいたしまして、今までのご努力を皆さんに見ていただき、また、お集めになった品物の本当のよさも十分に見ていただくことがいいのではないか」「いろいろな意味で収集をされた方をむしろ顕彰する」「ずっと前から小井川潤次郎君に非常にお親しく願っておりましたので、青森県の小井川さんからご寄附を今年は願った次第であります」〔山田 2018:28〕。この「郷土人」の展示室の他に、博物館の二階のスペースが広く取られ、市民の写真や小中学校の児童生徒の作品の展示などが想定されていた〔山田 2018:29〕。

しかし、人文系の資料室については、岡田一男が次のような回想を記している。「杉本の当初案は民具博物館で、民具展示にも一室があてられ、その準備に関わったのが宮本馨太郎（一九一―七九）だった」〔岡田 2016:25〕。わずかな記述であるが、宮本馨太郎が何らかの形で、十和田科学博物館に関わったことが読み取れる。人文系の展示室に最初に展示されたのは小井川潤次郎のコレクションであったにせよ、杉本は展示室のコーディネートを馨太郎に期待していたことは推測できよう。

馨太郎の子息、瑞夫氏もまた開館式当日、十和田湖畔にいた。2018年3月7日に筆者は宮本記念財団を訪れ、財団代表理事である瑞夫氏から十和田科学博物館開館の頃の話聞いた。父馨太郎とともに北海道に行った帰りに十和田科学博物館に寄り、馨太郎は開館式の前日に展示の手直しをして、開館式には出席せずに帰った、と瑞夫氏は記憶していた。

敬三の「旅譜と片影」を見ると1958年8月20日に羽田から千歳空港に向かい、千歳で鈴木醇と会い、札幌での民族人類学会に出席するのが主な目的と見られ、支笏湖、月寒、札幌、小樽、余市、蕃部、余市、小樽を経て鈴木醇と落ち合い、函館、湯之川を経て、函館から鈴木醇夫妻と青森に向かい、博物館の開館式に出席していることが分かる〔澁澤 1993:399〕。弘前大学寄託資料にある十和田科学博物館の「芳名録」を見れば、開館式当日の冒頭頁には渋沢敬三以下の名が見え、馨太郎の名前が載るのは29日になってからである（写真3）。

ここで民具学における宮本馨太郎の仕事を概観しておく。馨太郎は、自著によると、アチックミュージアム民具研究室で、足半草履、紡織技術、絵巻物の共同研究を行い、『民具問答集』[アチックミュージアム編 1937]の編纂、『民具蒐集調査要目』[アチックミュージアム編 1936]の改訂に携わった。1937年、東京都保谷に日本民族学研究所が開設され、翌38年に民族学博物館が建設され、アチックの民具がここに寄贈されると、民族学研究所の研究員となった[宮本 1964]。1942年の学会改組にあたって馨太郎は敬三から博物館の収蔵民具の台帳作成を命ぜられ、宮本常一とともにこれを完成した[宮本 1964]。

また、1949年頃からはじめたアチックミュージアム収蔵民具の再整備を進め、アチックのメンバーとともに謄写版の資料集を民族博物館彙報[財団法人日本民族学協会付属民族博物館刊]としてまとめ、コレクションの意義づけを行った[加藤 2020: 209]。十和田科学博物館開館の1953年には、馨太郎の単著『本邦在来鎌の調査資料第一(鎌図集)』と、常民文化研究所の刊行物としてアチックのメンバーとの共著『日本の民具』が刊行されており、多忙な日々を送っていた。杉本の馨太郎への期待は大きかったものの、馨太郎の杉本の事業へのスタンスは、公的な場面では表に出ず、陰で手助けをするも、責任を取る立場ではなかった。

杉本の事業の経営面に目を転じると、博物館と無料休憩所を持つ安価な宿泊施設は、事業として成功した。杉本は回想録の中で、修学旅行生が雨に濡れながら木陰で弁当を食べる姿を見て、博物館と学生会館、無料休憩所を建てようとした[神崎 1989: 40]という。しかし、1993年刊の聞き書きでは、博物館を建てても、遊覧船を降りた観光客は乙女の像のある観光館の方に行ってしまうので、当時の「博物館は公営のもの」という人々の固定観念を利用して、「博物館無料休憩所」を作った[笹本・小笠原 1993: 150]という。無料の休憩所に人が集まるようになり、そのおかげで人の流れが変わり、隣接する学生会館食堂がいつも満員になった[笹本・小笠原 1993: 150]と回想している。

以上、本章では次のことを確認した。民具の博物館への思いは、敬三よりも杉本の方が強かった。十和田科学博物館は、地方の民間博物館でありながら、一流の研究者を招いて組織した博物館として日本の博物館史上、記録されるべきものであった。その上で郷土の研究をしてきた人を顕彰する一室を準備していたことは、敬三の考える地方博物館のあり方を考える上で重要である。敬三は十和田湖の地理、自然を活かし、郷土人が参画するエコミュージアム⁽¹⁶⁾的な発想で博物館を構想していることが分かる。一方、実業面から考えると、国立公園に指定された場所ながら有効な観光施設を持たなかった青森県に博物館と宿泊施設、学生会館を設立したことは修学旅行生を迎える上で優位

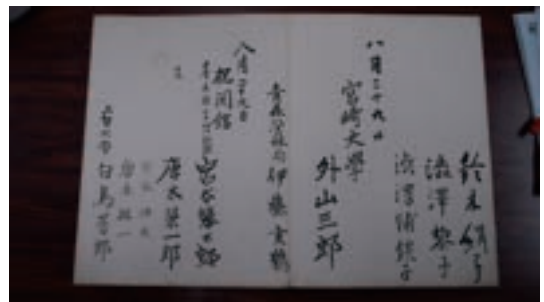
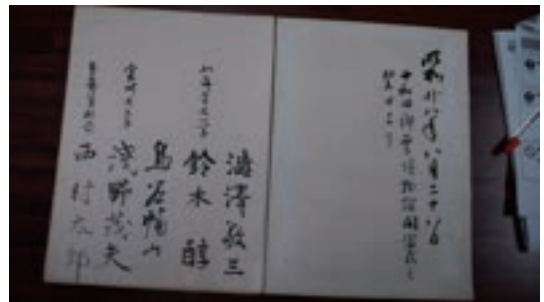


写真3 十和田科学博物館「芳名帳」
(弘前大学寄託旧蔵資料)

に働いた。杉本は1961年に十鉄系列のバスターミナルを十和田に設立、駅から休屋まで往復するバスを十鉄で準備した。また1967年には冬期間の観光客と大量輸送を予想して大型鉄鋼の双胴船を二艘就航させている〔神崎 1989:51〕。交通機関と宿泊施設と博物館が、観光と学術研究と教育を結びつけ、杉本の最初の博物館設立は順調にすべり出したといえる。

しかし杉本が最も誇りに思ったであろうことは、この仕事が、敬三から「自ら高いパブリックマインドを持ち、黙々として、自ら名も利も求めず、人に与えることばかり考えている人」という言葉を導いたことである。敬三は『文芸春秋』1955年5月号に掲載された「民衆の中に生きるひとびと」と題する文章の中で、杉本をこのように評した。実利の追求と公共道徳の両立は、洪沢栄一の信条でもあり〔佐藤 2018 221〕、杉本はかねがね「片手に算盤、片手に論語というのが僕の経営方針」〔神崎 1989:39〕と語っていた。杉本は敬三の、先の評価がよほどうれしかったようで『十和田科学博物館』2号に同文を再掲している〔洪沢 1955, 十和田開発株式会社編 1976:3~5〕。

④……………小川原湖博物館から小川原湖民俗博物館へ

十和田科学博物館で成功を取めた杉本が次に取りかかったのが、小川原湖民俗博物館である。この博物館は、設立当初は国鉄東北本線三沢駅に隣接する建物にあった。杉本は材木置き場と製材用地に駅に近ければ材木や製材の搬出に便利だと1948年（昭和23）にこの土地を購入していたのである〔神崎 1989:45〕。杉本は、社長を務める十鉄の財政が苦しく新しい事業のために自分の土地を使って何かできないかを考えて敬三に相談したところ、「十和田に科学博物館を作ったんだから、三沢には民俗博物館を作ったらどうか」〔神崎 1989:46〕とすすめられたと語っている。



図2 「民族と家郷」掲載図 十和田湖と小川原湖を結ぶ道路図

『小川原湖博物館』創刊号〔1981〕によると、敬三には小川原湖を中心とした自然、人文を広く含む博物館の構想があり、杉本にも「小川原湖と十和田湖を結ぶ大規模な観光計画」があったが、民具の収集に当たった八戸市の郷土史家中道等が精力的に努力した結果、貴重な民具が大量に集まり、その結果民具を中心とする「小川原湖民俗博物館」と改称することになった〔石川 1981:1〕〔山田 2018:30〕。

このような経緯で中道等は「小川原湖民俗博物館」初代館長となった。そこで敬三の揮毫した「小川原湖博物館」の看板は、敬三の字体をまねて杉本が「民俗」の字を書き足すことが行われた。

杉本の構想していた「大規模な観光計

画」について本人が回想したものが1959年2月15日の『十和田観光』第19号（十和田観光電鉄刊 弘前大学寄託旧蔵資料）に「民族の家郷 小川原湖とその周辺」と題して掲載されている（図2）。それをまず見てゆこう。

1952年の初秋に月刊『東北人』主幹の氏家利和に、「幕末に小坂鉦山の鉦石を載せた船が三沢沖で転覆し、発掘作業をしていた友人が金鉦の一片を小川原湖の河口近くで発掘したので見に行かないか」と誘われた。そのときの小川原湖の秋枯れの風景に衝撃を受け、「全く漂渺そのもの。淋しさの果てともいふべき風景に、私はただ呆然として浸っていた。／未だかつて、こんなに小気味よく人間をつき離す風景に接したことがない」と記している。

杉本は1958年7月27日に小川原湖周辺文化財めぐりに、版画家の棟方志功、中道等、1948年に発足した津軽民俗の会の会員であった成田末五郎⁽¹⁸⁾、成田彦衛らと同行している。「成田彦衛」とあるのは、成田彦栄の誤字ではないかと考えられる。成田彦栄（1898～1959）は、医業の傍ら、郷土史特に考古学関係に多くの業績を残した人物であり、戦前・戦後にかけて、郷土資料の保護に尽力し、考古資料、アイヌ資料、古文書等を広く収集した⁽¹⁹⁾。当時の青森県では、「郷土研究」の枠組みには考古学も民俗学も民族学も含まれていた。

このときの感慨から杉本は、次のような決心を記す。

自然の造形美の極地を見せる十和田国立公園に対し、漂渺とした大味な風景の中に、古代文化の遺跡と多くの資源を包蔵し、広大な夢を抱かせる小川原湖とを結ぶ観光道路を作ることである。

さらには次のような感慨も記している。

私は静かに思う。縄文時代の先住民族のこと―

太平洋から黒潮に乗って南下した民族が、この大川原、尾駸、鷹架の入り江に上陸した場合、彼等の目にはいかにも住みよさそうな豊かな獲物のある平和郷として映ったであろうし彼等が欣喜してこのほとりに住みついたことが想像できる。……略……深い深い民族の郷愁がここに満ちているのだ。

「黒潮に乗って南下」の意味は不明だが、小川原湖に異民族が集う「古代」を幻視するのは、杉本のみの発想ではなかったと考えられる。「小川原湖周辺文化財めぐり」には、先に見たように中道等が同行していた。

中道等については、佐々木達司〔佐々木 20021：540〕、高井典夫〔高井 2013〕、小池淳一〔小池 2020：49～61〕らが評伝を記しており、それらによると、次のような生涯を送っている。1892年に宮城県に生まれ、1918年に八戸市の中道トシと結婚し、中道姓になる。1922年に青森県史編纂主幹となり、その後上京、出版社経営の後、1945年に横浜市市民博物館館長を務めていた。戦後は青森に帰り、行政の村史や市史の編纂執筆に取り組んだ〔小池 2020：50～53〕。

中道等が1951年4月7日に渋沢敬三に宛てた手紙が、小川原湖民俗博物館特別展「渋沢敬三と

アチックミュージアム」で展示された。その内容の一部を示す。

小生も横浜市の市民博物館を一任されましてこれからというところでアノ横浜の大空襲に遭い何も彼もメチャクチャとなり内外人から大に要望されて居りまして未だに再建の気ざしさ見えません。小生は市を去りまして友人といっしょに三年前から「公安文化社」と申すものをつくり月刊の小さな公安文化を出しては小さな世相に対する旧慣を齎らしているようなあんばいです。さて昨年は夏から冬にかけて青森県の上北郡に滞留御承知の七戸町を始め大深内、甲地、十和田のぐるりの村々を探索しまして実に確然とした巨石文化の遺跡を発見いたしました。七戸では安全なストーンサークルを二つ見出しました。

その外にも巨石崇拜の跡があるので今年も五月になったら出かけようと只今いろいろ用意して居ります。小川原沼を昔海岸としてもっていた上北郡は単にアイヌ民族のみではなくて昔の肅慎（靺鞨、勿吉、女真、その他といわれた）のツングースが沢山此の地に渡来して一種狩場の生活文化相を形成していたらしい—という小生二十年來の予想、予感が着々遺跡や種々の遺物にあらわれて来たものですから小生は今年一杯はあちらに居りまして出来るだけ異民族と土地の民俗、自然現象の消長などいろいろな点をみっしりと調査するつもりで緊張して居ります先日鎌倉で長谷部言人博士と東北の民族の古いところを語り合いましたがどうもピンと落着きませんでした。

嘗は事物によって議論を示すより仕方がないと深く考えたことでもありました。

小川原湖を擁する上北郡一体に古代の異民族の混在する生活を幻視するという発想は中道のものでもあったことが分かる。小川原湖民俗博物館には石器の資料も収蔵されており、1973年頃まで小川原湖民俗博物館に勤務した民具コレクターの田中忠三郎もまた、民具収集の前は考古資料の発掘に勢力を傾けていた。民具を「縄文から続くもの」とする発想は田中の書いたものにも見られ[田中 2009: 178]、ある意味、同時期の青森県の郷土研究をする人々にはある程度共通して見られる性質であったともいえる。

総合博物館を目指していた小川原湖博物館を民俗博物館に変えたのは、「洪沢先生の教え」ではなく、中道等の情熱であった。その情熱は、アチックミュージアムの「仲間」とは別の、中道の、もっと言えば青森県の郷土研究の文脈から生まれたものだったといえよう。

杉本と中道が小川原湖を「おがら」と読ませることにこだわり、1963年刊行の『小川原湖博物館案内』[小川原湖民俗博物館編 1963]の表紙にもわざわざ「おがら」とルビをふらせたのも、「アイヌ語のオカリ、オカイルは、いわば廻ること、つまり周りをぐるりと廻り得るという義だから、アイヌ族がオカリト（トは湖の義）と称えたいらしい」[小川原湖博物館編 1963: 10～11]という理由であった。

杉本が構想した、小川原湖の自然を活かした観光開発の夢は、1960年代末に青森県と国が打ち出した「むつ小川原開発計画」による潰えることになる。「むつ小川原開発計画」は、青森県上北郡六ヶ所村を中心とする一帯に石油化学コンビナートや製鉄所を主体とする大規模臨海工業地帯を整備することを目的とした開発計画であったが、コンビナートは実現せず、のちに原子力関連施設

が進出することとなった。また、杉本は1969年に十鉄の経営権を小佐野賢治に譲って退陣した〔小川原湖民俗博物館編 1989：51〕。

⑤……………民具研究の基盤を作る

中道は、小川原湖博物館の開館にあたり、衣食住のものを中心に「これ一つなくても暮らしが出来なかったという品物を沢山集めよう」「大体一〇〇年経ったものを集めよう」〔中道 1981：13〕という方針で民具を蒐集した。洪沢敬三は、中道の精力的な働きを評価しながらも戸惑いがあったことは杉本に語ったことばからもうかがえる。「あれだけアクの強い人だから中道博物館になってしまうぞ」〔神崎 1989：48〕。

しかし、そのような事態にならなかったのは、宮本馨太郎の力も大きかったと考えられる。立教大学で博物館学を教えていた馨太郎は、1962年度と63年度の博物館実習を三沢市根井で実施している。日本で最初の民俗学による博物館実習である。実習の内容は聞き取り調査と民俗資料整理で、仮台帳をもとに民俗資料収蔵台帳・民俗資料附票・民俗資料基本カードなどを作成し、民具に附票を添附し、民俗資料の測定して収蔵台帳と基本カードへの記入、民具の写真撮影を行っている。実習の詳細は、1963年刊の立教大学博物館講座編・刊『mouseion - 立教大学博物館研究』9号、1964年刊行の『mouseion - 立教大学博物館研究』10号に掲載されている。

この時の台帳が民具移設の際に発見された。「立教大学民俗資料室（A）」と印刷された紙は1961年のものから残っていた〔長尾・古川・山田・小島 2016：6（山田担当執筆）〕

民具受入台帳が博物館に残されていたということは、立教大学の博物館実習の成果が小川原湖民俗博物館にそっくりそのまま置いてきたものと推測される。小川原湖民俗博物館に1972年から勤務していた桜庭俊美は、この立教大学の受入台帳の存在を知らず、受け入れ台帳から作成されたカードの存在のみを知っていた。

いずれにせよ小川原湖民俗博物館には民具整理の方法は受け継がれており、桜庭俊美が学芸員として配置されて以降は、実地調査に基づいた民具のバックデータが蓄積されてゆくことになった。⁽²⁰⁾

馨太郎は1962年度に科学研究交付金「日本在来民具の民族学的研究」を受ける。瑞夫氏の記憶では、馨太郎のお供でボストンバッグに科研費を詰めて電車に乗り、岩手県水沢の森口多里を訪ねたという。⁽²¹⁾この科研のメンバーには竹内利美、

野口武徳、中村俊亀智などが名を連ねている。アチックのメンバーに新しい東北の仲間を加え、共同で研究しながら、新しいメンバーに「民具学」のあり方を教えていったことが想定される。中道はこの科研の成果で、「民具に宿る信仰心理」という論攷をまとめている〔中道 1963〕。二股に分かれた自然木をそのまま利用して穀物の脱穀に使われるマドリを題材に、木の材質を選別するところに樹木に



写真4 立教大学民具受入台帳
(三沢市六川目団体活動センター所蔵 筆者撮影)

対する人々の信仰心理がうかがえるとしている。

青森県の側の記憶で「宮本先生が来館し調査したのは一回程度」〔古川 2019: 85〕と書かれているが、中道等がなくなった1972年以降、馨太郎と小川原湖民俗博物館の関わりは限定的であったかもしれないが、博物館の基盤を作るときに、馨太郎の関わり方が、博物館の方向性を決めたことが推測できる。

また、小川原湖民俗博物館は、宮本馨太郎にとっては、杉本行雄という「気心の知れた」相手の「仕事場」であり、学生を伸び伸びと実習をさせられる場所であった。馨太郎自身にとっても、自由な立場で民具の分類、整理のための試行錯誤を重ねることが可能な場所であったことが推測される。

小川原湖民俗博物館では、民俗芸能大会の会場に古牧温泉の敷地を提供したり、催し物として民俗芸能を披露する場を設けたりしていた。また、敬三の教えに従い、博物館内に六ヶ所村から民家を移築し、そこで年中行事を行っていた。寄託資料には移築した民家でイタコを4人招いてオシラ遊ばせをした写真が残っている(写真5)。この写真以外の写真ではオシラ遊ばせを見ている観客は、カメラを手にしたり、スーツを着たりしており、このような行事を見学するのは外部の人々であったことが読み取れる。

一方、地域の住民の側はどうであったであろうか。『博物館報2』(弘前大学寄託旧蔵資料)1981年3月23日に、次のような記事がある。十和田湖町奥入瀬の女性と十和田市稲生町のカミサマと呼ばれる民間宗教者が博物館を訪問して次のようなことを語った。庚申像が20数年前にA氏(原文は本名を記載)の土地から出土し、それを斡旋する人がいて博物館に寄贈したところ、家で病人が絶えない。庚申に変わるものを建てたが、A氏の家と斡旋した人の家でやはり病人が絶えないので博物館に参詣に来た。また展示品は西を向いているが太陽の出る方に向けないといけないと忠告した。

博物館を受容した地域では、博物館の収蔵品となったものも信仰の対象であることから切り離されるわけではなかったことが読み取れる。地域の人が「博物館を受容した」という内実は、必ずしも博物館の役割や意義を理解したわけではなかったといえる。

博物館に携わる人もまた、民俗的な世界と距離が取れていたわけでもなかった。中道等は、杉本行雄が経営する上北郡野辺地町の旅館まかど温泉でイタコを集めオシラサバセをした際に、民俗学者の岩崎敏夫と二人で渋沢敬三の「魂よばい」をしたことを回想している〔中道 1981: 12〕。

まだ県立の博物館もなかった時代に、先駆的な方法で蒐集展示をした博物館は必ずしもその意図通りに受け取られたわけではなかった。同じ種類の民具を重複をいとわず蒐集するという方法は地元ではあまり理解されなかったようだ。まだ行き先の決まっていない旧蔵資料が残っていた段階で資料を散逸させずに保存することを訴えていた際に悩まれたのは「よいものだけ選んで保存すればよい」という「助言」や「同じ種類のものがいくつもあるのが不思議だった」という声であった。しかし、その一方で「祖母が民具を寄贈した」「民家を移築したときに手伝った」といった収蔵品を通した個々の思い出は、旧蔵資料移設作業のボランティア募集の際や、保存を呼びかける活動のときに力となった。

小川原湖民俗博物館は中道館長のもとで、民具を見せるだけではなく、民俗芸能大会を開き、年

中行事を再現し、映像記録を残してきた。調査研究だけではなく、地域の交流の場としても、娯楽の場としても、機能してきたといえよう。その陰に、民具を蒐集、整理する上での基盤となった馨太郎の仕事忘れてはいけない。



写真5 イタコのおシラアソバセ (1967年 新渡戸明撮影)

おわりに

小川原湖民俗博物館の軌跡について、新たな資料群からおぼつかない筆を執ってきた。

杉本行雄は渋沢家に仕えていた間に培った東京での人間関係を資源として、青森県の十和田市と三沢市に博物館を二つ作った。

渋沢敬三の意図通りに作ったと杉本は公言していたが、十和田科学博物館は敬三の構想通りであったが、小川原湖は中道等の意向が大きかったことが分かった。また、中道の民具への理解は、異民族が共棲したと想像した上北地区の古代への憧れや期待を内包したもので、このような発想自体は、青森県の郷土研究の仲間にも通じるものであった。しかし宮本馨太郎らの援助でアチックの同人と交わり、民具の調査法を知る中で、民具に内包される信仰心理という中道独自の民具観を持つに至った。博物館を受容した地域の側は、民具を寄贈したり、民俗芸能に参加したりする形で博物館になじんできた。

小川原湖民俗博物館が、民具がまだ文化財として認知されていなかった時代に成功した陰には、立場の違う者達がお互いの思惑に深くは立ち入らず、それぞれの文脈の上で納得できる仕事をなし、それぞれが影響を与えあったということが挙げられよう。豊富な民具を持ち、温泉という娯楽施設を備えた博物館は、地域の人々に支えられながら、博物館史に残る特色ある民間の民俗博物館としての歴史を刻んできた。時はおりしも高度経済成長期を迎え、「懐かしい日本」を訪ねて東北を旅する旅行者の心を捉える博物館として一時代を築いたといえる。

註

(1)——「ハーモニアスデヴェロップメント」とは渋沢敬三が「アチック根元記(一)」[渋沢 1935:1]において、研究の理想として挙げた概念で、加藤幸治によれば「共鳴し合いながら互いの成長をはぐくむ協同性」といった意味が込められており、「アチック・ミュージアムの活動の根幹をなすもの」[加藤 2020:1~2]である。

(2)——加藤幸治「アチック・ミュージアムにおける水産史研究における「同時代的な布置」と「問題意識の多様性」」[国際常民文化研究機構編 2029:19]

(3)——[神崎 1989:28]。しかし、1963年8月に刊行された小川原湖博物館編『小川原湖博物館案内』(弘前大学寄託資料)では、展示民具を「三千数百点」と書

いている。祝宮静が『民間伝承』27巻11号(1963年10月)に寄稿した「注目すべき小川原湖民俗博物館」に「三万五千点」とあるのは桁の間違いか[祝 1963:172]。1972年から小川原湖民俗博物館の学芸員であった櫻庭俊美氏によれば、博物館の収蔵民具の数は、膨大なため整理が追いつかず、「本当の数は誰も数えたことがない」と述べている(2015年 筆者聞き書き なお、本稿の桜庭氏への聞き書きは2015年のものである)。

(4)——本論の前提となる資料の整理事業は、2015年以降、弘前大学地域未来創生センターの事業として採択されたものである[渡辺・山田 2016:21-22]。2017年度から2019年度には科学研究費助成事業基盤研究(C)

「地方における『民俗』思想の浸透と具現化—渋沢敬三影響下の民間博物館をめぐって—」（研究代表 山田厳子）が採択され、民俗学史、博物館史、交通史、文学史の交錯する「場」として小川原湖民俗博物館を位置づけた。本論は当該科研（JSPS KAKENHI Grant number 17k03268）の成果の一部である。なお、研究分担は以下の通りであった。小池淳一（郷土研究と博物館）、丸山泰明（渋沢敬三と博物館史）、小島孝夫（民具）、仁平政人（博物館と近代文学）。また桜庭俊美（元小川原湖民俗博物館学芸員）、長尾正義（元三沢市教育委員会生涯学習課）、福島春那（青森県民俗の会会員、元青森県史編さん室）、古川実（元青森県立郷土館学芸課）の各氏からは甚大な協力を賜った。

弘前大学での旧蔵資料の整理作業の概要やその成果は以下の資料を参照のこと〔山田厳子監修 2017年、山田編 2019年、2020年、山田 2018a, b〕。

（5）——主なものに『国立歴史民俗博物館研究報告』165集 2011年収録の諸論文。とりわけ同報告書収録の小池淳一「共同研究『日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究』の構想・経緯・成果」、佐藤健二「近代日本民俗学史の構築について／覚書」参照。また、近代の口承文芸研究のいとなみを、同時代の「声を聞く」方法の模索の中に位置づけ直した日本口承文芸学会編「声の採集者列伝」（『口承文芸研究』30号 2007年）も参照のこと。

（6）——青森県史編さん民俗部会編『青森県史 民俗篇 資料南部』2001年、同編『青森県史 民俗篇 資料下北』同編『青森県史 民俗篇 資料津軽』2014年の各巻には「民俗研究のあゆみ」という章が用意されている。

（7）——致道博物館は、旧荘内藩主酒井忠良が土地建物および伝来の文化財などを寄附した財団法人以文会が前身である。1952年博物館法による博物館施設、財団法人以文会立致道博物館として運営し、1957年財団法人致道博物館と改称、2012年より公益財団法人致道博物館となり現在に至る（「致道博物館の沿革 <https://www.chido.jp/about/> より要約。2021年10月20日検索）。

（8）——北方文化博物館は、越後の豪農伊藤家が屋敷の遺構と財産を寄付し、戦後の私立博物館第一号となった。北方文化博物館という名称は、スウェーデンにある「Nordiska Museet（北方民族博物館）」に由来する（「北方文化博物館の歴史」<https://hoppou-bunka.com/history/> より要約。2021年10月20日検索）。

（9）——〔神崎 1989：28〕

（10）——金山は、北方博物館設立の挿話として、戦後のGHQ（General Headquarters: 連合国総司令部）による地主制解体を受け、GHQが越後の大地主伊藤文吉の家を調査した際に、責任者ラルフ・ライトがペンシルベニア大学で伊藤と同窓生であったことが判明し、ライトから、文化遺産を散逸させないために財団法人にして博物館を作ることを助言されたことを紹介している〔金山 2001：199～200〕。

（11）——〔神崎 1989〕〔笹本・小笠原 1993〕〔稲垣 1996〕

（12）——小川原湖民俗博物館に残されている民具カードの一覧表〔小島 2020：95～123〕や『小川原湖博物館』創刊号「民具および民俗学寄贈者芳名録」〔十和田開発会部式会社編 1981：17～23〕を見ると旧蔵者の住所に現在の十和田市にあたる住所が多いことが見てとれる。また、三沢市六川目団体活動センターに保管されている旧蔵資料の民具カードには「鈴」を「シズ」と表記するなど、訛りをそのまま表記したと見られるものが散見され、整理に当たっては地元の人間が協力したことが分かる（2018年12月15日筆者調査による）。

（13）——十和田科学博物館は長く閉鎖状態になっていたが、2015年7月30日に、植物標本や写真パネルが十和田科学博物館にほど近い十和田市ビジターセンター（十和田市大字奥瀬字十和田湖畔休屋 486番地 <https://www.env.go.jp/park/towada/guide/towadavc/index.html> 2022年3月12日検索）に移設された〔『東奥日報』2015年7月30日〕。同じく科学博物館にあったカルデラ模型も復元され展示されている〔山田 2020：3〕。

（14）——小川原湖民俗博物館旧蔵資料渋沢敬三のレコードより筆者が翻字。〔山田 2019〕にその一部を、〔山田 2020〕に全文を掲載。

（15）——小井川潤次郎は1888年（明治21）に八戸で生まれた郷土史家。1915年（大正4）に八戸郷土研究会を創立した〔小井田 1981：317〕。渋沢敬三と小井川潤次郎の交友の一端は、映像「男鹿、能代、藤琴、石神、八戸」の中に垣間見える〔宮本他編 2016：260～261〕。昆政明の解説によれば、1934年9月7日に石黒忠篤、高橋文太郎、大西伍一、早川孝太郎、小川徹、村上清文、武藤銭城らと男鹿半島を訪れ、9日に八戸郷土会主催の小井川氏を訪れている。一行は小井川の自宅らしき場所でイタコのおしらあそびを見学、撮影している〔昆 2016：258～261〕という。

（16）——このことは敬三の、未完に終わった「渋沢青淵翁記念実業博物館」もしくは「日本実業史博物館」構

想の、「個人の顕彰を含む経済史・実業史の構想」と重なり合う。「埋もれた無名の人びとの事績や略伝を展示して『社会教育資料』に資する」[佐藤 2018: 230～231]という計画は、十和田科学博物館の展示構想の中にも認められる。

(17)——エコミュージアムは、日常生活や仕事場などをそのまま博物館として展示・見学する方式で、地方文化や地域社会の復興を図る一助とされる。1971年にフランスのアンリ・リヴィエールが発案した (<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=50010Z-04-2-0478> 20221001 検索)。

小川原湖民俗博物館旧蔵資料の「資料収集関係綴 NO.2」(三沢市教育委員会所蔵)には「十和田科学博物館 四八年度方針 私感 本間印」という文書が収録されている。「十和田湖住民が山でとっためずらしいものをなにげなくもってくる。湖水でとれた奇形の魚ももってくる…。館内には各分野のアマチュアや研究グループが常に入出入りしていつも何かしている」という像を「理想」として描き、「私はこの理想を実現します」と記されており、住民参加型の博物館構想がより鮮明に打ち出

されている。また同綴には、昭和48年(1973)3月19日付の文書「十和田湖自然科学同好会(仮称)趣意書」が収録され、学生や一般の科学愛好家を組織する計画があったことが確認できる。当時の館長は地質学の石川俊夫北海道大学名誉教授であった。石川俊夫は鈴木醇の北大時代の教え子で、その縁で小川原湖民俗博物館でも一時期館長を務めた。

(18)——泊青森県史編さん民俗部会編『青森県史民俗編 資料津軽』2014 513～514頁

(19)——「弘前大学図書館」『東遊雑誌』上巻寄贈経緯 <http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/collection/rare/toyul/index.html> 20211011 検索。成田彦栄のコレクションは、弘前大学人文学部附属北日本考古学研究センターに寄贈されている。

(20)——桜庭によれば、学芸員にとっては決して恵まれた職場ではなく、桜庭は休日を使って調査を行っていたという。

(21)——岩手県立博物館所蔵の森口多里書簡の中には宮本馨太郎から森口にあてた書簡が残されている(岩手県立博物館 米田寛氏ご教示)。

参考文献

- 青森県史編さん近現代部会編『青森県史 資料編 近現代6』2014年 青森県
アチック・ミュージアム編『豆州内浦漁民史料』上, 中, 下 1937年8月, 1938年5月, 12月
飯田 卓「財団法人日本民族学協会(1942年～1964年)と附属民族学博物館(1937年～1962年)——アーカイブズ資料をとらえてその性格をふり返る」『日本文化人類学会編『文化人類学』85巻2号 2020年9月
石垣 悟「澁澤敬三の民俗学—その方法と可能性」『國學院雑誌』第118巻4号 2017年4月
石川俊夫編『十和田科学博物館』創刊号 十和田開発株式会社 1974年
石川俊夫編『十和田科学博物館』第2号 十和田開発株式会社 1976年
石川俊夫編『小川原湖民俗博物館』創刊号 十和田開発株式会社 1981年
稲垣真美『観光巨人伝 杉本行雄物語』旅行読売出版社 1996年
小笠原国雄著『渋沢農場と三本木原の夜明け 水野陳好杉本行雄両先生に仕えて』誠幸園印刷指導所 1995年
小笠原国雄『渋沢農場と三本木原の夜明け』誠幸園印刷指導所 1996年
岡田一男「映像史における渋沢・宮本フィルムの価値とその保存・継承」[宮本瑞夫他編 2016]
岡田桑三「十和田科学博物館創設当時の思い出」十和田観光開発編『十和田科学博物館』第2号
小川原湖博物館編・発行『小川原湖博物館案内』1963年
小川原湖民俗博物館編『小川原湖民俗博物館と祭魚洞公園』ぎょうせい 1989年
加藤幸二『渋沢敬三とアチック・ミュージアム』2020年 勉誠出版
神奈川大学常民文化研究所編『民具マンスリー』第48巻12号 2016年
神奈川大学国際常民文化研究所編『国際シンポジウム報告書五 渋沢敬三の資料学—日常史の構築—』2014年
神奈川大学国際常民文化研究機構編『国際常民文化叢書 第一三巻戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究』2019年
金山喜昭著『日本の博物館史』慶友社 2001年
川島秀一編『渋沢敬三 小さな民へのまなざし』アーツアンドクラフツ 2018年
神崎宣武「博物館と地域おこし—渋沢敬三と杉本行雄の系譜—」[小川原湖民俗博物館編 1989]
小井田幸哉「小井田潤次郎」東奥日報社編・発行『青森県百科事典』1981

-
- 古川 実「小川原湖民俗博物館の展示」[山田編 2019]
- 国立民族学博物館編『国立民族学博物館十年史』1984年年
- 国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館十年史』199一年
- 国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告』第165集「[共同研究]日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」2011年
- 小島孝夫「小川原湖民俗博物館旧蔵資料の現状と課題」[山田編 2020: 95～123]
- 昆 政明「男鹿, 能代, 藤琴, 石神, 八戸」[宮本他編 2016]
- 笹本一夫・小笠原カオル『挑戦 五五歳からの出発 古牧温泉物語』実業の日本出版部 1993年
- 佐藤健二「渋沢敬三におけるもう一つの民間学」神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』30号「特集 渋沢敬三没後五〇年」2014年2月
- 佐藤健二「日常史の資料学の課題—柳田國男と渋沢敬三に学ぶ—」[神奈川大学国際常民文化研究所編 2014年a]
- 佐藤健二「近代日本における「実業」の位相: 渋沢栄一を中心に」平井雄一郎・高田知和編『記憶と記録のなかの渋沢栄一』法政大学出版局 2014b
- 佐藤健二「実業—渋沢敬三と渋沢栄一」『文化資源学講義』東京大学出版会 2018
- 佐々木高雄著『青森県人名事典』東奥日報社 2002年
- 渋沢敬三「アチック根元記 (一)」アチック・ミュージアム編『アチックマンスリー』1号 1935年
- 渋沢敬三「民衆の中に生きるひとびと」『文芸春秋』文芸春秋社 1955年5月号
- 澁澤敬三『澁澤敬三著作集』第4巻 1993年 平凡社
- 杉本行雄「刊行のあいさつ」[小川原湖民俗博物館編 1989年]
- 杉本行雄「民族の家郷 小川原湖とその周辺」十和田開発株式会社『十和田観光』19号 1959年2月15日
- 田中忠三郎「下北 忘れえぬ人々」東北工科大学東北文化研究センター『別冊東北学』1号～6号 2000年7月～2003年7月 連載
- 田中忠三郎『下北 忘れえぬ人々』2008年 楡原会社荒蝦夷
- 田中忠三郎『図説みちのくのお布の世界』2009 河出書房新社
- 十和田開発株式会社編『十和田科学博物館』第2号 1976b年
- 十和田開発株式会社編『小川原湖博物館』創刊号 1981年
- 長尾正義・古川 実・山田厳子・小島孝夫「民具の保存管理の現状と課題—小川原湖民俗博物館編旧蔵資料をめぐる活動—」[神奈川大学常民文化研究所編 2016]
- 中園 裕編『青森県の交通史』2016年 デーリー東北新聞社
- 中山正則編『柏葉拾遺』柏窓会 1956年
- 中道 等「民具に宿る信仰心理」『物質文化』第2号 1963年9月
- 中道 等「中道等館長挨拶」[十和田開発株式会社 1981]
- 日本口承文芸学会編「声の採集者列伝」『口承文芸研究』30号 2007年
- 日本民具学会編『民具学事典』丸善出版 2020年
- 祝宮静「注目すべき小川原湖博物館—東北の民俗資料センター—」『民間伝承』第27巻4号(通巻262号) 1963年10月
- 宮本馨太郎編『日本在来民具の民族学的研究 第一年次 東北の民具』1963年 財団法人日本民族学協会
- 宮本馨太郎編『日本在来民具の民族学的研究 第一年次 東北の民具』1962年 財団法人日本民族学協会
- 宮本馨太郎「三十五年の学恩」第28巻第4号 1964年10月号
- 宮本常一著『民具学の提唱』未来社 1979年
- 宮本常一著『宮本常一著作集』50 渋沢敬三 田村善次郎編, 未来社 2008年
- 宮本瑞夫「映像に見る常民生活の伝統と再生」[神奈川大学国際常民文化研究所編 2014]
- 宮本瑞夫他編『甦る民俗映像』2016年 岩波書店
- 山田厳子「地方における民間博物館への『まなざし』—渋沢敬三の声のレコードから」2018a・11『日本民俗学』296号 第899回 日本民俗学会談話会「民間博物館の可能性」179～180頁
- 山田厳子「渋沢敬三影響下の地方民間博物館—「声のレコード」をめぐる—」[川島編 2018b]
- 山田厳子監修 弘前大学人文社会科学部民俗学研究室編『小川原湖民俗博物館弘前大学寄託旧蔵資料調査報告』2017年 弘前大学地域未来創生センター
- 山田厳子編『市民と文化財: 博物館的想像「力」』2019年 弘前大学地域未来創生センター
-

山田巖子編『地方における「民俗」思想の浸透と具現化—渋沢敬三影響下の民間博物館—』弘前大学人文社会科学部
地域未来創生センター 2020 年

渡辺麻里子・山田巖子「地域の民俗・文献史資料など，文化資源の調査研究と公開および地域ネットワークの構築」
弘前大学特定プロジェクト教育研究センター 地域未来創生センター編『地域未来創生センタージャーナル』2
号 2016 年

立教大学博物館講座『mouseion—立教大学博物館研究』9 号 1963 年

立教大学博物館講座『mouseion—立教大学博物館研究』10 号 1964 年

(弘前大学人文社会科学部，国立歴史民俗博共同研究員)

(2022 年 11 月 21 日受付，2023 年 3 月 31 日審査終了)

Activities to Preserve a Former Museum's Collection Materials : On Local Private Museums under the Influence of Keizo Shibusawa

YAMADA Itsuko

The Ogara Lake Folklore Museum in Misawa City, Aomori Prefecture, opened in 1961 and closed in 2015. It was known as a local private museum specializing in *mingu* (folk crafts implements) that was opened by a businessman in the early postwar period under the guidance of Keizo Shibusawa. In the course of taking possession of some of the material in the collection and sorting it out, the following three points became clear. First, Keizo Shibusawa had envisaged this museum as a comprehensive museum, but thanks to the work of local historian Nakamichi and others, a vast number *mingu* were collected, and as result, it became a “folklore museum.” Second, Nakamichi intended to present this region as place of exchange between the Japanese and other peoples since ancient times. Third, Keitaro Miyamoto, who played an important role in making Japanese *mingu* a cultural property, provided the Ogara Lake Folklore Museum with resources for organizing *mingu*, and may have been involved with the museum as a place to gather “draft plans for the classification and arrangement of civilian tools” in a vast collection. The establishment of this museum was made possible by the diverse conceptions of the researchers, local historians and a businessman who took part in its creation.

Key words: Local Folk Museums, *mingu*, Miyamoto Keitaro, Before Cultural Properties, Railways, Keizo Shibusawa